

農村女性 第24号

ネットワーク通信

H24 年 12 月

★農業分野における男女共同参画推進 普及啓発セミナーの開催

平成 24 年 10 月 15 日（月）午後 1 時 30 分から高知共済会館で開催され、農村女性リーダー、農業委員会会長、農業委員会事務局、J A、農業振興センター職員など 65 人が参加されました。

1 基調講演

○演題：ボクが男女共同参画に目覚めたワケ

●講師：新木 雅之（四国森林管理局長（元内閣府男女共同参画局総務課長））

内閣府男女共同参画局総務課長として業務を行った時、これからの時代はこれかなと思った。そしてこれこそ自分の仕事と思えるようになった。

◆日本は人材活用ができていない後進国

女性が働くためには①仕事につくとき、②結婚するとき、③産休のときの 3 つのハードルがあり、産休時には働く女性のうち 6 割が退職する。そのため、日本では年齢別の女性就業率が M 字型のカーブを描くことが知られており、先進国の中では、日本は韓国に次いで女性就業率が低い水準である。日本には未だ男尊女卑が残り、経済協力開発機構（OECD）からも男女平等の配慮が足りないと言われている。

◆企業は活躍する女性を求め出している

日産自動車のカルロス・ゴーン社長は「これからの日本企業は女性を争って獲得する時代がやってくる」と言っている。理由としては、①ダイバーシティ（多様性）が重要、②顧客の 2/3 は女性、③女性の才能（女性チームが作ったヒット車種「マーチ」）が期待されるからである。最も重要なのはダイバー

シティであり、反対意見などがあってこそ新しいものが生まれる。同じ因子だけでは発展しない。ダイバーシティの観点では外国人を加えることも考えられるが、日本ではまずは「女性」からであり、「女性」を活用すべきであり、「女性」を役員等に登用しないと会社は立ちゆかない。

◆ワーク・ライフ・バランスの確立

今後の対策としては、①仕事と家庭の両立（ワーク・ライフ・バランスの見直し）、②子育て支援の充実（子どもを生み育てる仕組みづくり）、③固定的性別役割分担意識の見直しなどがあげられる。

男女共同参画の推進を女性のためだけにやっているように感じている人も多いが、男性に対しても国では



ポジティブ・アクション（積極的改善措置）などによって取り組まれている。まだまだ少ないが、男性が育休を取る（育児に関わる）ことで、①赤ちゃんから元気をもらう、②家族の安心、③家族の絆、④家事・育児のスキルの習得、⑤自己の充実感などが得られる。男性も「おーいお茶」ではなく「おーいお茶ダヨ」と家庭で言えるようにしよう。このようなところから始めたらいいのではないか。

◆男女共同参画は時代の潮流、社会の希望

女性が農力（能力）を発揮しているところの地域が活性化している。地域の人材は限られているので、男女がどうこう言う場合ではない。みんなで取り組む必要がある。地域の方針決定の場に女性をメンバーに加えることが重要である。そうすることで①新しい視点が加わる、②女性ネットワークにより情報が広がる、③女性が元気になり、地域が活性化する。国際通貨基金（IMF）のラガルド専務理事も女性であり、アメリカの名だたる IT 企業の社長には女性が多い。日本は女性の能力を使っていないので、伸びしろがある。性別を言っている時代ではない。「女性」を活かすことが潮流である。

2 活動事例報告

●JA高知女性組織協議会会長・宮脇 真弓

平成 14 年に J A 役員（理事）になった。役員は 22 ～23 人うち女性は 2 人で、職務が難しそうだと思ったが、理事になってみると住み心地はよかった。理事になって 3 年目に職務について話す機会をいただいたが、その時他の役員から褒めていただいたことが誇りになっている。夫と喧嘩もしたが、会議を休まないことをモットーにやっている。

平成 16 年には勉強会を発足させた。人が大好きでネットワークや人脈づくりはできたと思う。今はそのネットワークがエネルギーになっている。



●安芸市農業委員・野町 亜理

農業委員になるきっかけは、平成 17 年に女性の農業委員への登用に向けた研修会に出席したことである。就業人口の 5 割以上が女性であり、それに見合った発言力が必要であることをそこで学んだ。

平成 20 年に農業委員となり現在は 2 期目、新しいチャレンジは子育てに似ており、自分自身今も成長している。平成 17 年に結んだ家族経営協定に記した「お互いの理解者になること」が私を後押ししてくれている。農業委員になった時は、農地法の知識不足で分からないことばかりであったが今は何とかやっている。全市町村の農業委員会に 2 名以上の女性農業委員がいるようにしたい。次の農業委員の改選時には女性もトライしてほしい。

●高知県農業会議会長(四万十町農業委員会会長)・林 幸一

四万十町農業委員会では、8 月の改選で女性農業委員が 1 人増え 5 人（うち議会推薦 3 人）となっている。女性の意欲だけでは農業委員になることは難しい。最後は夫の「やっちゃれや」の一言、後押しが必要である。県下の女性農業委員数は 31 人、農業委員総数（617 人）の 5%となっている。各市町村農業委員会で複数の女性の登用をお願いしたい。

★男女共同参画推進フォーラムの開催

平成 24 年 11 月 8 日（木）午後 1 時 15 分から「6 次産業化による経済的自立に向けて」と題して高知共済会館で開催され、農村女性リーダー、農漁村女性グループ研究会員、農業振興センターの担当職員など 55 人が参加されました。その後は高知パレスホテルに場所を移して交流会（参加者 31 人）が開催され、16 人の農村女性リーダーからご提供いただいた食材を使った素敵なおいしい料理が出されるなど、至福の時を楽しませていただきました。

1 基調講演

○演題:女性の起業が進める6次産業化

●講師:安倍 澄子（社団法人農山漁村女性・生活活動支援協会調査研究課長、日本女子大学客員教授）

◆女性起業の現状

女性起業を支援する取組が始まって 17 年が経つ。平成 22 年度の全国的女性起業数は 9,757 件、起業は個人経営に比べてグループ経営が多いが、近年は個人経営数の伸び率が高くなっている。年間売上金額



は 300 万円未満が 5 割となっており零細な経営が大半である。また活動内容は食品加工が 7 割で大半を占めている。

◆地域資源を活かす

第 1 次産業＝「地域資源を作り出す人」である。地域資源とは①自然、②生産物、③景観、④人材であり、地域資源を活かすことが起業の強みである。生産者ならではの売り方や価値のつけ方に 6 次産業化の重要な視点がある。同一の市場の同一時点における同一の商品は同一の価格であるという「一物一価」から、商品は企業活動によって色々な価格がつくという「一物多価」で考える必要があり、価値をどう作るかが重要である。また、商品を作った時には、誰に食べてもらいたいのか、ターゲットを定めた売り方でもある。

◆直販によるローカルフードシステムの形成

農産物を市場やメーカーに供給するだけではバリューチェーン（価値連鎖）は成り立たない。農産物に価値をどう付加するのか、そしてその商品が売れることで1次産業にお金がどう戻ってくるのかが非常に重要である。そこで、地域内発型アグリビジネスである「ローカル・チェーン・システム」の構築が必要であると考えている。そのためには農業に関連する産業及び事業がお互いに結びつくことによって、新たな相乗効果を生み出すための仕組みである「食料産業クラスター」を地域に作る事が基本となるが、地域に来てもらって、お金を落としてもらう（直売所、関連施設）仕組みも必要である。

自分達の生き甲斐産業を地域の活性化へとつなげてほしい。そして、地域に根ざしたローカルフードシステムの構築を考えてほしい。地元市場と都心市場では商品が違うので別個に考える必要がある。また生鮮で売なのか、加工して売なのか、労力配分も踏まえて経営計画を立てる必要がある。これまで女性が加工技術をもっていたので「女性起業」と言っていたが、これからは男女共に取り組む「経営の多角化」である。

直販所を核としたローカルフードシステムを形成してはどうか。今後の直販所は生産者の所得拡大や地域資源の活用のために消費者、農業と食品・関連産業をつなぐビジネスを興す「コーディネーター」の役割を担うことが求められている。

2 パネルディスカッション

○テーマ：地域資源を活かした6次産業化

○コーディネーター・アドバイザー：安倍 澄子

○パネリスト：永森 文英、真辺 由香、

白木 浩一、中山 美佳、居長原 信子

●永森 文英(中央東地区・青年農業士)



香美市でやっこねぎ、トルコギキョウ、水稻を栽培している。6次産業については、興味のある程度で素人である。やっこねぎは全て系統出荷で「安全・安心・安定」を

目指してやってきた。それが将来ずっと続くものかどうかを考えた時に、加工について考えるようになり勉強を始めている。

●真辺 由香(嶺北地区・農村女性リーダー)



米粉パン専門店「米米ハート」を作って4年目。現在は米粉スイーツ等も販売。こだわりは嶺北の米粉を使うこと、可能な限り嶺北の農産物を使うことと、

いつでも旬の食材で農家の顔が見える商品が作れること。この取組が地域の新たな雇用の場となり、人材育成を行っていると自負している。女性が元気なところは地域も活発になる。女性組織のネットワークを大切に、有意義なものにしていきたい。

●白木 浩一(中央西地区・青年農業士OB)



日本で唯一、四季の文旦を栽培（露地、ハウス）。カタログ通販とネット通販で全国に無料発信している。文旦ジュース、マーマレード、オイルの加工品も開発。皆さんが作っている農産物、

加工品は「本物」であるが、それを伝える手段が無いからお客様に買ってもらえないこともある。今はマスコミュニケーションの時代であり、1人の情報がクチコミなどによって拡大する時代。皆さんもこのような情報発信の仕方にチャレンジしてほしい。

●中山 美佳(高吾地区・農村女性リーダー)



緑茶の生産・加工・販売の法人経営、法人化して30期目。大半を荒茶で市場出荷していたが、価格の大暴落により平成7年頃から製品の仕上げ販売に着手し現在に至っている。六次産業

化法に基づく総合化事業計画の認定申請に当たっては色々なセミナー等に参加し、非常に多くのことを学んだ。今、県の産業振興計画により、色々な勉強できる機会がここ2~3年あるので皆さんにも是非参

加してほしい。自分達の役割を自覚しつつ、やらなければならないことをやる時期だと思う。「自分達にできること」がキーワード。皆さんも是非、行動に移してほしい。

●居長原 信子(高南地区・農村女性リーダー)



(株) おかみさん市の代表取締役社長。発足 11 年目の昨年、株式会社化した。これまでは行政主導でやってきたが、3 年位前から「自立しなければ」と考えてやっている。難しく考えないで、

自分達でできることを考えることが大事である。おもてなしバイキング(農家レストラン)も「私達も、料理ならできるよね」から始まったもの。しかし、これがまさしく 6 次産業であり、郷土料理の伝承活動も兼ねている。都会の人が食べに来てくれる。お客さんから「料理に癒される」と言われたことがある。まさにそれかなと実感している。



高知パレスホテルでの交流会

☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆

「男女農業共同参画講演会」

高知地区 竹内 佳代

8 月 27 日、高知農業改良普及所で土佐清水市の農村女性リーダーの山本美加さん夫妻を招き「大規模農業経営に取り組んで」と題して講演会を開催しました。講演では、水稻を中心とした経営から、優良農地を借りて特産品のナバナとラッキョウ経営に転換したことや、共同経営による規模拡大、儲けたら従業員にボーナスを出したり、視察旅行に行ったり



することで、従業員も作業効率を高めるなど相乗効果も生まれているなどのお話がありました。

自分達の農業があることで、地元が潤う、素晴らしいお話でした。

「四万十町十和の美味しいものを広げよう」

高南地区 田辺 客子

7 月 31 日、四万十町内の家庭科の先生を対象に、地域農産物を使った料理講習会を開催しました。

料理講習会では、十和を代表する料理「しいたけのタタキ」を始め、「巻き寿司、夏野



菜のかき揚げ、りゅうきゅうときゅうりの酢の物、みそ汁」と5品の料理の講習を行いました。実習中、四苦八苦して巻き寿司を巻く先生の姿や熱心にメモをとる姿がとても印象に残りました。今後は、先生との交流はもちろん、地域の子供達にも、食べることの大切さ、調理することの喜び等を、食育を通じて伝えることができるように取り組んで行きたいと思います。

【編集後記】

今年も後わずかになりましたが、皆様どのような一年だったでしょうか。秋の研修会で勉強した事を来年活かす事ができればいいですね。

能勢、松村、西笛

【お問い合わせ等は事務局まで】

高知県農業振興部環境農業推進課 担当 武井

電話 088(821)4535

●こうち農業ネットがリニューアルオープン

<http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/>